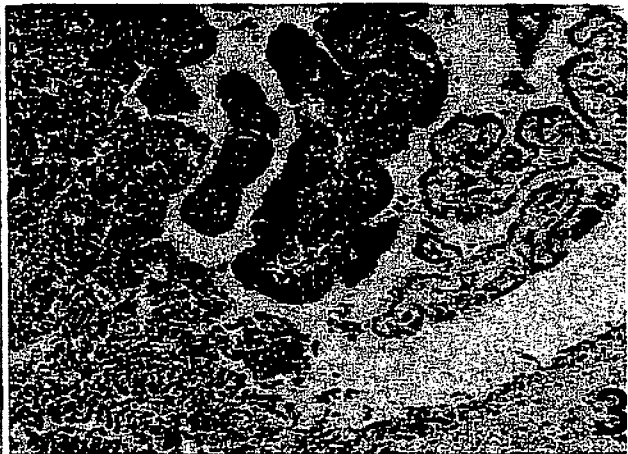
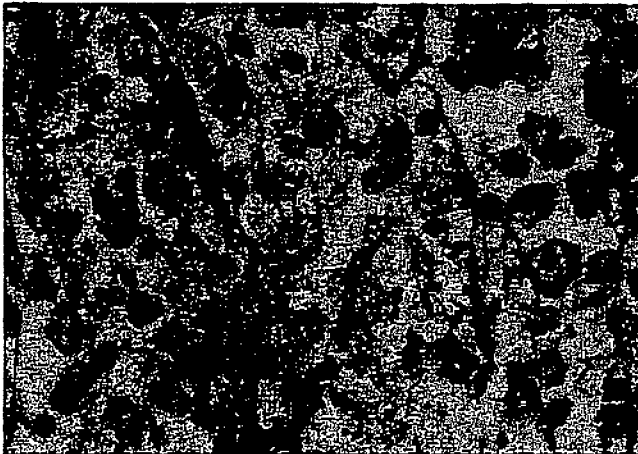
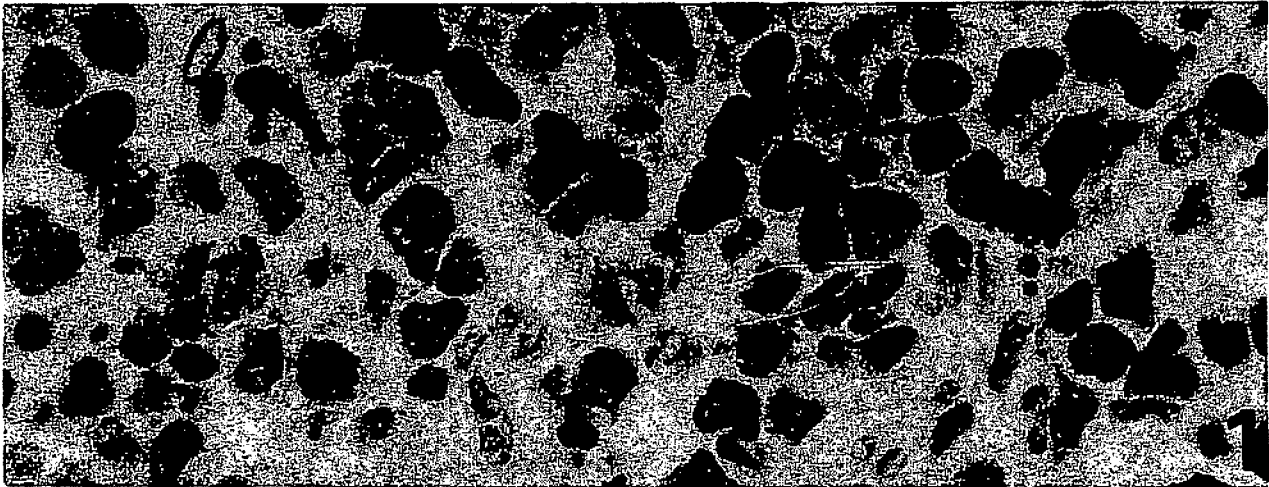


老猫の腎にみられた細網肉腫

麻布獣医科大学病理学教室出題—第8回獣医病理学研修会標本 No.117—



1967年1月、食欲減退と嘔吐を主訴として上診された15才の去勢牡猫に著しい腎腫大を認め、対症療法にて一時軽快を見たが再び症状悪化し、安楽死後剖検した。

臨床症状・血液所見の推移は、表1・2の如くである。

表1 臨床症状の推移

症状	1966		1967	
	年月日	%	年月日	%
嘔吐	+	+	+	+
口内潰瘍		+	+	+
腎の腫大	+	+	+	+
腹部圧痛		+	+	+
血尿			+	+
貧血		+	+	+
腹前		+	+	+
後極踏限			+	+
肌球振盪			+	+

表2 血液所見

検査項目	1967		1967	
	年月日	%	年月日	%
赤血球数	10/100	425	10/100	445
白血球数	10/100	21.7	10/100	24.8
好中球	10/100	10.0	10/100	13.0
好塩基球		74.0		80.0
好酸球	10/100	0.5	10/100	0.5
好塩基球	10/100	1.0	10/100	0.1
リンパ球	10/100	9.5	10/100	4.5
単球	10/100	5.0	10/100	2.0

肉眼的所見：被毛失沢、極度に瘦削し、脂肪織なし。脾は、濾胞・脾材共に明視、肝の左外葉・右外葉に数個の大豆大結節、脾体部に拇指大の結節を認めた。生前より腫大が触知された左腎は、拇指大の結節の集合物と化

していた(重量約180g)。右腎は、約30g表面不整であったが、腎の構造は比較的良く保たれていた。副腎の腫大も著しく、皮質と髓質の境界は判然としなかった。脳を含めた上記以外の臓器には、肉眼的変状を認めなかった。組織学的所見：左腎は腎盂近くに残存する集合管や腫瘍細胞中集団の中に残存する萎縮した糸球体が腎である事を示しているが、殆んどは大小不同で、類円形の核と大きな核小体・好塩基性の原形質により特徴づけられる腫瘍細胞の集団と化しており(写真1 40×10, H&E染色)、索状配列と格子線維形成がみられ(写真2 40×10, Gomori 格子線維染色)、細網肉腫と診断された。右腎では、糸球体周囲及び間質に腫瘍細胞の浸潤がみられ、副腎髓質は殆んど腫瘍細胞で占拠せられ、皮質にも小転移巣が存在した。肝および脾の転移病巣では、実質細胞は萎縮しており、腫瘍はびまん性に浸潤する傾向を示した。脳には、肉眼的変化をみとめなかったが、視交叉部での横断切片で脈絡叢への転移(写真3 4×10, H&E染色)と脳底部実質への浸潤が認められた。上記以外の臓器には、腫瘍の転移病巣を見出せなかった。